

《論 文》

平成29年度 第66回全日本大学サッカー選手権大会における 流通経済大学のゲーム分析・検証から見る日本サッカー界への提言

大 平 正 軌

Proposal for Japan soccer from the game analysis and verification of
Ryutsu Keizai University of THE 66th All Japan University Football Championship Tournament

MASAKI OHIRA

キーワード

サッカー (soccer), ゲーム分析 (analysis), 攻撃のコンビネーション (combination), 得点力 (scoring power), 全日本大学サッカー選手権大会 (All Japan University Football Championship Tournament)

1 はじめに

流通経済大学サッカー部は平成29年度 第66回全日本大学サッカー選手権大会において3年ぶり2回目の優勝という輝かしい結果を残すことが出来ました。(表1参照)

本稿は、その優勝までの軌跡を示すとともに今大会を検証し今後の更なるチーム強化、選手育成、指導者育成の参考とするために、将来に資する「振り返り」「分析と総括」を意図したものです。

この全日本大学サッカー選手権は夏に開催される総理大臣杯全日本サッカートーナメントと双璧をなす大学サッカー最高峰の大会で66回を数える歴史あるものであります。前回大会の覇者・筑波大学は第97回天皇杯全日本サッカー選手権大会でJリーグのチームを次々と破りベスト16という輝かしい結果をもたらした。大学サッカーの更なる進化を証明してくれました。準優勝は日本体育大学、3位大阪体育大学と阪南大学でした。

過去10年間の歴代優勝校は表2に示す通りです。

2 大会概要

期間：2017年12月13日～24日

場所：浦和駒場スタジアム（埼玉県）

NACK5スタジアム大宮（埼玉県）

柏の葉公園総合競技場（千葉県）

浦安市運動公園陸上競技場（千葉県）

栃木市総合運動公園陸上競技場（栃木県）

足利市総合運動場陸上競技場（栃木県）

江東区夢の島競技場（東京都）

上柚木公園陸上競技場（神奈川県）

真岡市総合運動公園陸上競技場（栃木県）

江戸川区陸上競技場（東京都）

日程：1回戦 2017年12月13日（水）

第1試合11時キックオフ/

第2試合13時30分キックオフ

2回戦 2017年12月16日（土）

第1試合11時キックオフ/

第2試合13時30分キックオフ

準々決勝 2017年12月18日（月）

第1試合11時キックオフ/

第2試合13時30分キックオフ

表 1. 第66回全日本大学サッカー選手権大会トーナメント表

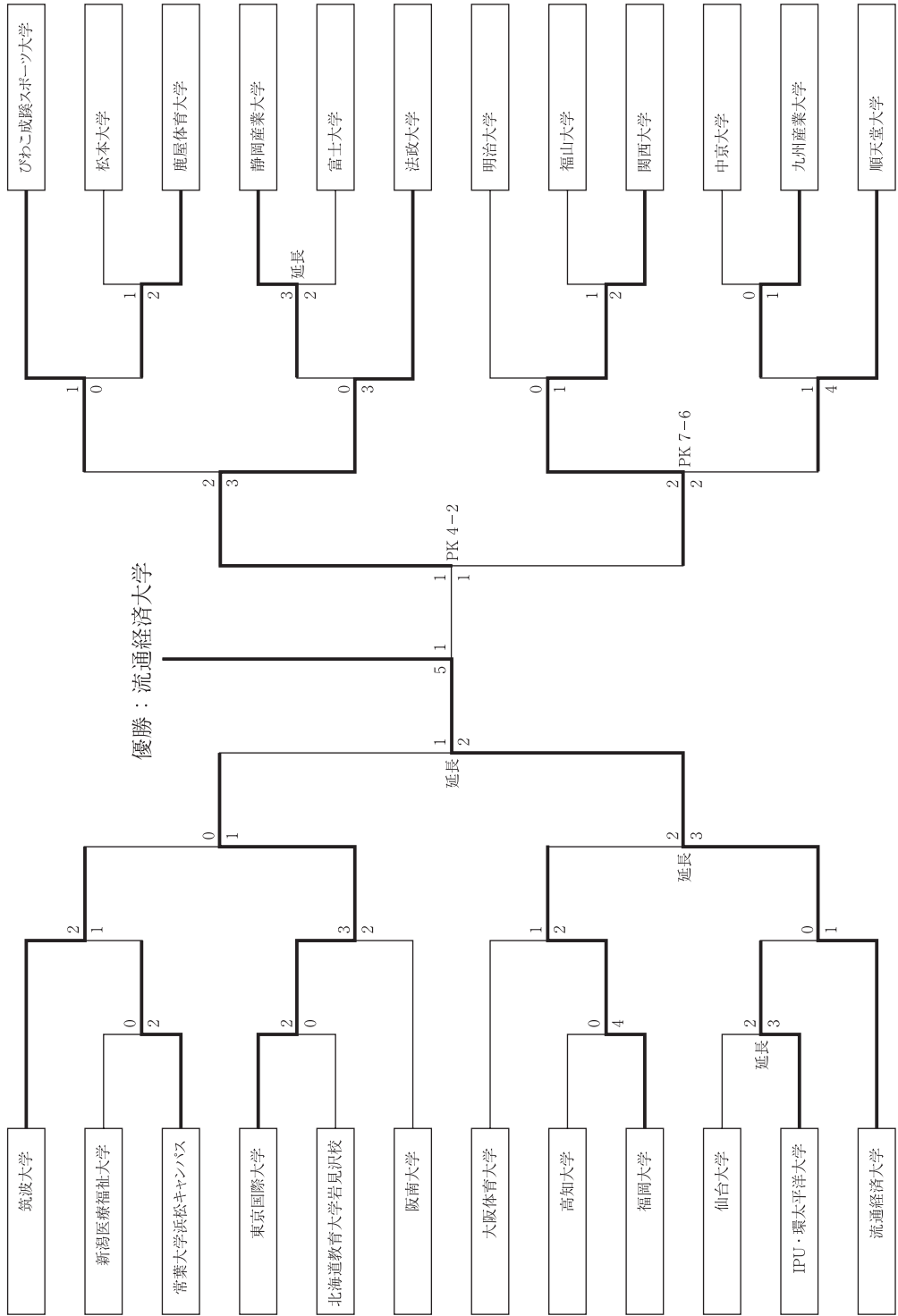


表 2. 過去10年間の優勝校

回	年	学校名
57	2008	中央大学
58	2009	明治大学
59	2010	関西大学
60	2011	専修大学
61	2012	早稲田大学
62	2013	大阪体育大学
63	2014	流通経済大学
64	2015	関西学院大学
65	2016	筑波大学
66	2017	流通経済大学

準決勝 2017年12月21日 (木)

12時キックオフ

決勝 2017年12月24日 (日)

12時キックオフ

参加チーム：地域大学サッカー連盟より選出された24チーム

北海道地区

第1代表 北海道教育大学岩見沢校
(4年連続7回目)

東北地区

第1代表 仙台大学 (17年連続34回目)
第2代表 富士大学 (初出場)

北信越地区

第1代表 新潟医療福祉大学
(5年ぶり4回目)

第2代表 松本大学 (初出場)

関東地区

第1代表 筑波大学 (2年連続36回目)
第2代表 順天堂大学 (4年連続22回目)
第3代表 流通経済大学 (2年ぶり11回目)
第4代表 明治大学 (9年連続17回目)
第5代表 法政大学 (2年連続29回目)
第6代表 東京国際大学 (初出場)

東海地区

第1代表 静岡産業大学 (2年連続12回目)
第2代表 中京大学 (3年連続39回目)
第3代表 常葉大学浜松キャンパス
(2年ぶり10回目)

関西地区

第1代表 びわこ成蹊スポーツ大学
(3年ぶり3回目)

第2代表 大阪体育大学 (5年ぶり20回目)

第3代表 阪南大学 (6年連続19回目)

第4代表 関西大学 (2年連続23回目)

中国地区

第1代表 IPU・環太平洋大学
(5年連続5回目)

第2代表 福山大学 (2年ぶり10回目)

四国地区

第1代表 高知大学 (24年連続33回目)

九州地区

第1代表 福岡大学 (2年ぶり41回目)

第2代表 鹿屋体育大学 (9年連続21回目)

第3代表 九州産業大学 (2年ぶり18回目)

3 流通経済大学の目標

2017年は3冠(総理大臣杯、関東大学リーグ、大学選手権)を目標に取り組んでいましたが、結果的には無冠で大学選手権に挑むことになりました。3位に終わった総理大臣杯は、1回戦シードで2回戦関西大学を2-0で勝利し、準々決勝東海学園大学とは接戦を制して2-1で勝利し、準決勝は同じ関東代表のライバル明治大学との対戦となりました。どちらが勝ってもおかしくない試合展開から途中出場の明治大学のエース木戸にスーパーゴールを決められて敗戦して3位となりました。通年で争われる関東大学リーグでは前期に3連敗と優勝が遠のく中、後期は7連勝と優勝争いに加わるも、筑波大学、順天堂大学に次いで3位で終了しました。勝負所で破れる結果となり目標を達成できないチームは、大学選手権のタイトルだけは頂点に立つんだという強い姿勢で大会に挑みました。4年生は1年生の時にこの大学選手権を初優勝して自分たちの代でもあの素晴らしい経験、光景を下級生に見せたいと一致団結していました。大会直前には街の応援団主催で壮行会が開催されOBで初優勝時の4年エー

スの江坂任（柏レイソル）も駆けつけエールを送ってくれました。

4 試合内容

2 回戦

vs IPU・環太平洋大学 1 - 0 (前半 0 - 0)

GK：新井

DF：小池，田中，今津，岡田

MF：守田，石田，新垣，ジャーメイン，渡邊

FW：星野

SUB：西岡，小野原，アピア久，清水，吉田，
渋谷，中村，高澤，宮津

上柚木公園陸上競技場にて11時キックオフ。快晴。グラウンドは天然芝だがシーズン終了が近いこともあり凸凹が見られる状態。

前半序盤は互いにロングボールの多い堅い展開となる。次第に個の能力を活かした攻撃で主導権を握り試合を優位に進めた。FW星野（流経大柏）の強さを活かしたポストプレーやFWジャーメイン（流経大柏・ベガルタ仙台内定）のスピードに乗った突破が目立った。相手のGKのビックセーブやポストに3回当てるなど攻めても点が取れない嫌な展開になったが両チーム無得点で折り返した。後半はDFラインからテンポ良くボールを動かし相手の隙を探りながらFW星野を起点に左サイドのDF小池（新潟ユース）とMF新垣（流経大柏）のコンビで突破を図っていった。IPUはDFラインを設定して距離間良くブロック形成を崩さない。そんな中69分FW星野がペナルティーの外から意外性のあるミドルシュートで待望の先制点を挙げる。（図1参照）その後、攻勢にでるIPUに対してMF守田（金光大阪・川崎フロンターレ内定）のプレスバックやカバーリングで対応して攻撃の芽を潰した。

最後は守備ラインを5枚に変えて厚くして無失点で試合を終えた。課題として、攻撃は決定力、守備ではカウンターになり得るロングボールの処理を修正すること、相手の意図しないロングボールがミスによりピンチになる場面が

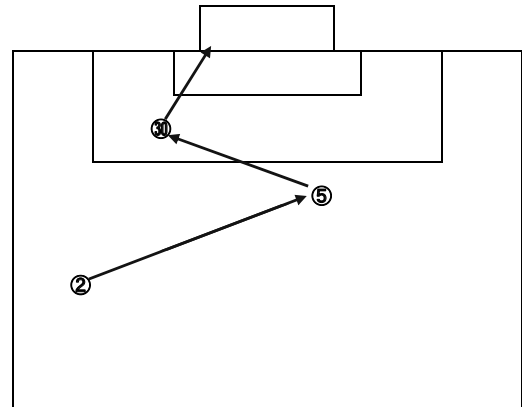
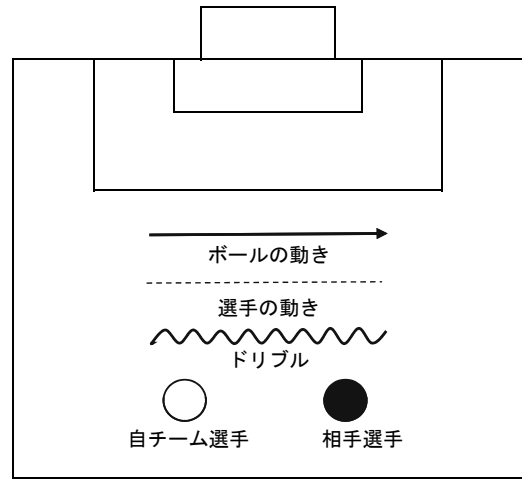


図1. 2回戦 vs IPU環太平洋大学 得点者：星野 秀平

あったことが挙げられた。

準々決勝

vs 福岡大学

3 - 2 (前半 1 - 1・延長 2 - 1 前半 1 - 1)

GK：新井

DF：小池，今津，守田，アピア久

MF：森永，立花，ジャーメイン，小野原，吉田

FW：宮津

SUB：オビ，宮内，清水，石田，新垣，渡邊，
渋谷，高澤，星野

柏の葉公園総合競技場にて13時30分キックオフ。快晴。グラウンドは天然芝で良好。

流通経済大学は1 - 4 - 2 - 3 - 1のダブル

ボランチでトップ下を置く配置。一方福岡大学は1-4-4-2で中盤をダイヤモンドの配置となった。両チーム共ロングボールからセカンドボールを拾って主導権を握りたい展開。流通経済大学は前半29分直接FKのこぼれ球をDF今津（流经大柏・ヴァンフォーレ甲府内定）が右足で押し込んで先制すると前半36分福岡大学がミドルシュートで同点に追いつき前半終了。（図2，図3参照）後半流通経済大学が選手交代から徐々にペースを掴みゲームを支配したが福岡大学が守備ブロックを形成して応戦する。延長92分に流通経済大学FW渡邊（新潟ユース・アルビレックス新潟内定）がヘディングで

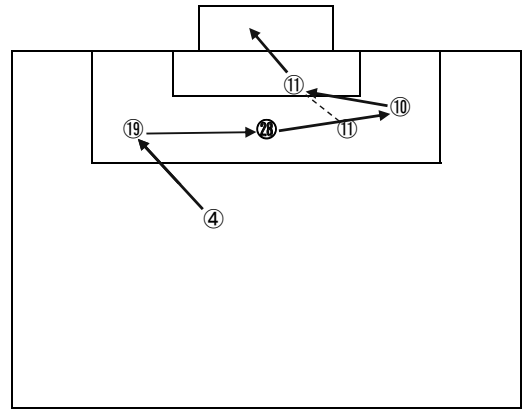


図4. 準々決勝 vs 福岡大学 得点者：渡邊 新太

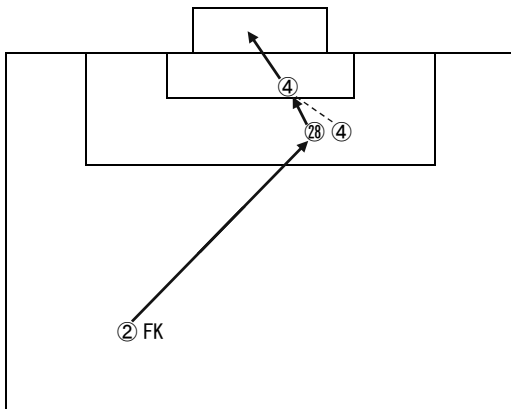


図2. 準々決勝 vs 福岡大学 得点者：今津 佑太

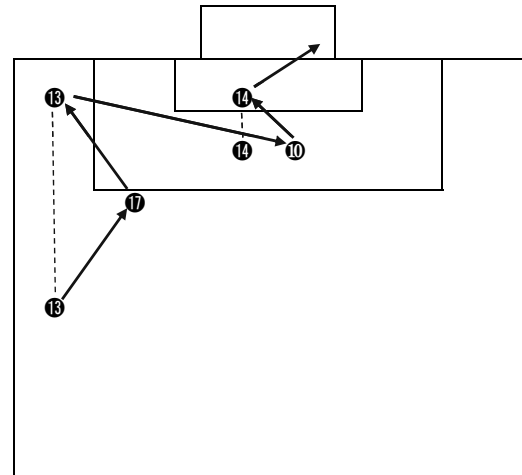


図5. 準々決勝 vs 福岡大学 得点者：山下 敬大(福岡大学)

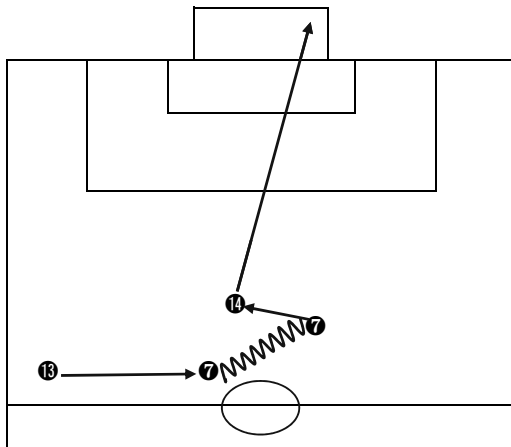


図3. 準々決勝 vs 福岡大学 得点者：山下 敬大(福岡大学)

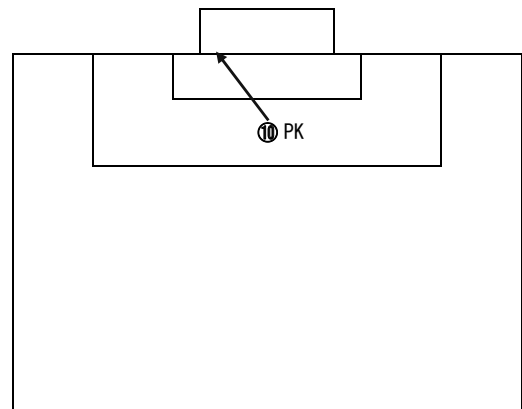


図6. 準々決勝 vs 福岡大学 得点者：ジャーメイン 良

突き放すが延長101分に福岡大学FW山下がこの日2得点目を挙げ再び同点としてPK戦かと思われたが流通経済大学が延長ロスタイム120+2分にPKを獲得してFWジャーメイン良が落ち着いて決めて劇的な勝利を取めた。(図4, 図5, 図6参照)

準決勝

vs東京国際大学

2-1 (前半1-1・延長1-0 前半1-0)

GK: 新井

DF: 小池, 守田, 小野原, 岡田

MF: 石田, 立花, ジャーメイン, 渡邊, 吉田

FW: 高澤

SUB: オビ, 田中, アピア久, 渋谷, 関, 中村, 森永, 星野, 宮津

柏の葉公園総合競技場にて12時キックオフ。快晴。グラウンドは天然芝で良好。

優勝候補の筑波大学を準々決勝1-0で倒してきた東京国際大学は1-4-4-2のシステム配置。一方延長で福岡大学を倒した流通経済大学はシステムを変更して1-4-4-2と相手と同じシステム配置で臨んだ。序盤両チームともコンパクトフィールドを中盤で守備形成して攻守の切り替えの速さ, 球際の戦いで一進一退の互角の展開となった。

東京国際大学は中盤エリアでゾーン守備からFW町田を使つてのカウンター攻撃がチーム戦術。流通経済大学はDF守田の堅実な守備から前線の特徴ある選手を生かした攻撃で多くのチャンスを作るも決定力を欠いていた。前半22分東京国際大学がMF川上の個人技で先制するも, 前半31分流通経済大学FW立花(流经大柏・横浜FC内定)のミドルシュートで追いつき振り出しに戻す。(図7, 図8参照) 後半流通経済大学が決定機を逃し延長戦までもつれるが, 延長100分, 途中交代FW宮津(浜名)が前線から守備をしてボールを奪いFW星野へパス, 落ち着いてゴールを決めて2試合連続延長戦を制して決勝戦に駒を進めた。(図9参照)

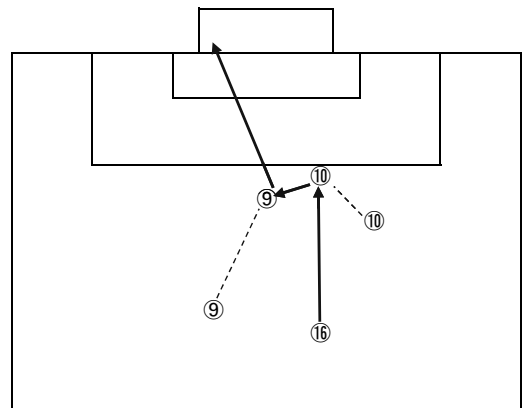


図8. 準決勝 vs 東京国際大学 得点者: 立花 歩夢

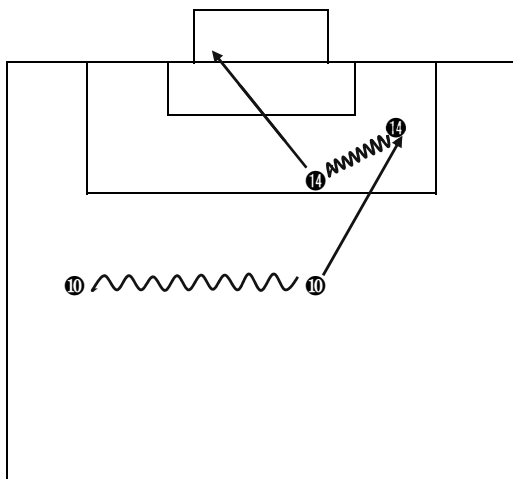


図7. 準決勝 vs 東京国際大学 得点者: 川上 翔平(東京国際大学)

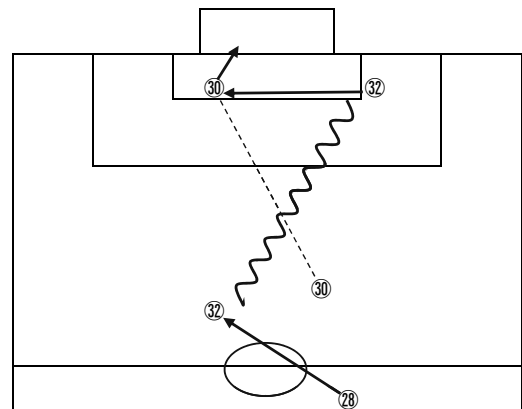


図9. 準決勝 vs 東京国際大学 得点者: 星野 秀平

決勝戦

vs 法政大学

5 - 1 (前半 1 - 0)

GK : 新井

DF : 小池, 田中, 今津, アピア久

MF : 守田, 森永, 立花, ジャーメイン,
小野原

FW : 星野

SUB : オビ, 岡田, 石田, 新垣, 渡邊,
吉田, 中村, 高澤, 宮津

浦和駒場スタジアムにて12時キックオフ。
曇。グラウンドは天然芝で良好。

夏の総理大臣杯覇者法政大学は、準決勝を関西第4代表の関西大学と対戦して1 - 1から延長の末PKで決勝に駒を進めてきた。システムは1 - 4 - 4 - 2。FWデイサロ, MF青柳を中心に攻撃を組み立て後半の勝負所で長身FW松澤やU20日本代表のFW上田を投入して勝利してきた。両チームとも縦にボールをシンプルに入れてFWの特徴を生かす戦術で勝ち上がってきただけに決勝戦も徹底してきた。前半14分早くも試合は動き、左のサイドアタッカーFW立花がドリブルで攻略、角度のないポジションからGKのニア上に強烈なシュートで2試合連続ゴールによる先制点を挙げた(図10参照)。この先制点に見られるように流通経済大学の攻

撃の特徴は両サイドにFW立花とFWジャーメイン良という個人で突破、得点を決められる選手を配置し両SB小池とアピア久(東邦)が後方からサポートしてサイド攻撃に厚みを加えるところである。法政大学は後半勢いを増すように選手交代でFW上田を投入してからの直後53分CKからDF加藤がヘディングで押し込み1 - 1とする(図11参照)。しかし60分途中出場のFW上田が負傷交代で退場し勢いに乗れず、一方流通経済大学は65分に交代で入ったMF新垣がカットインから得点して突き放し、さらに80分交代出場のMF渡邊がPKで追加点を挙げる(図12, 図13参照)。交代選手が明暗を分ける結

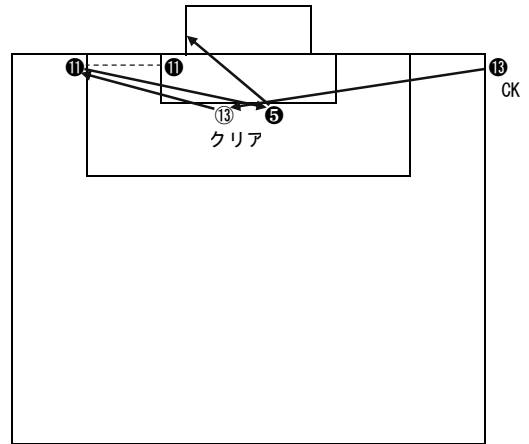


図11. 決勝 vs 法政大学 得点者: 加藤 威吹樹(法政大学)

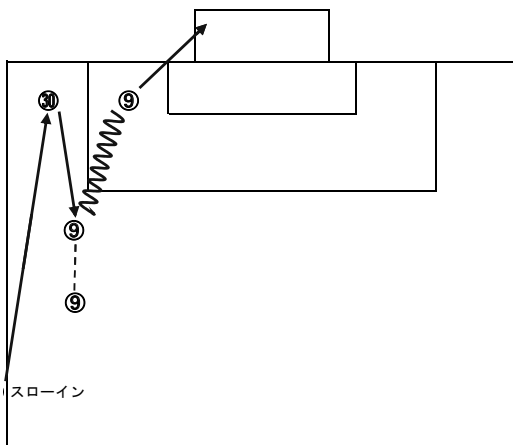


図10. 決勝 vs 法政大学 得点者: 立花 歩夢

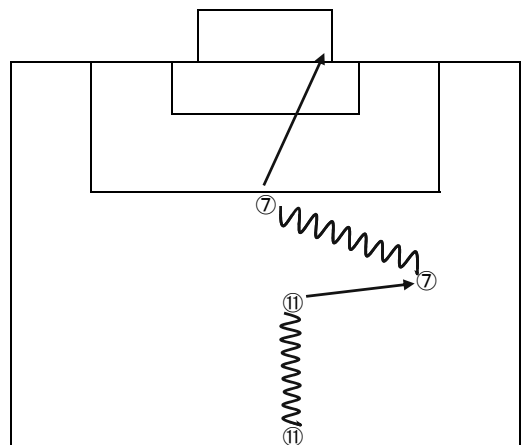


図12. 決勝 vs 法政大学 得点者: 新垣 貴之

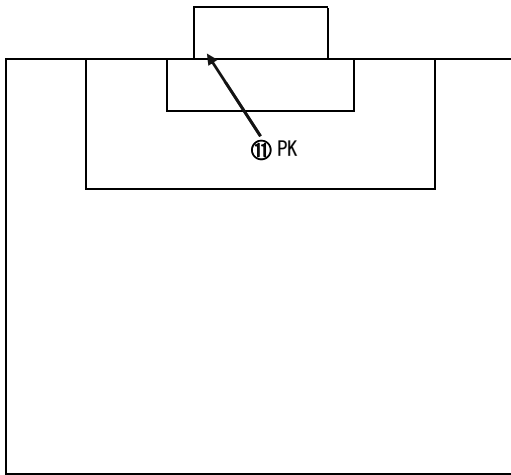


図13. 決勝 vs 法政大学 得点者：渡邊 新太

果となった。

ロスタイムに入りMF新垣がこの日2点目、途中交代のFW宮津が得点を決め5-1となり試合を決定付けた(図14, 図15参照)。選手交代が見事あたり3年ぶり2回目の優勝となった。観衆6456人の中、両チームとも攻撃サッカーを貫き激しく競り合う決勝戦にふさわしい試合となった。

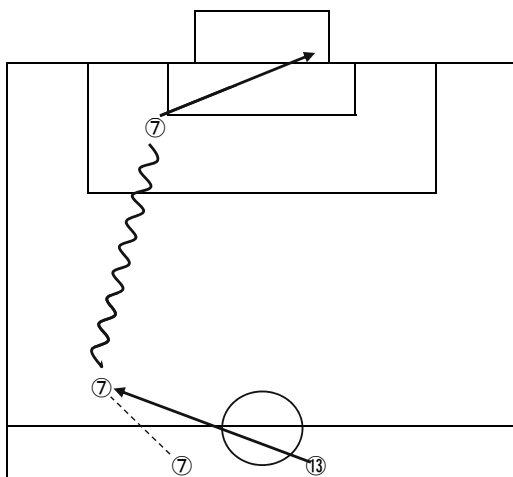


図14. 決勝 vs 法政大学 得点者：新垣 貴之

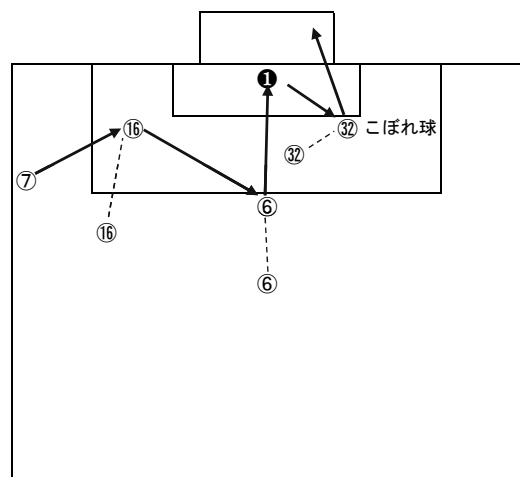


図15. 決勝 vs 法政大学 得点者：宮津 祥太

5 分析

ここでの分析は勝敗に基づいたものではなく、日本サッカー協会・技術委員会が2015年に発表した日本代表強化指針に沿って評価をしていく(表3参照)。

1) 原点回帰～サッカーの本質に立ち戻る

①ゴールに向かう意識 (Toward the Goal)

流通経済大学のシュート数はベスト8の中で1試合平均12.8であり、準優勝した法政大学と並びトップの値である。

同じ年に開催された第29回ユニバーシアード競技大会(2017/台北)で3大会ぶり6回目の優勝果たしたユニバーシアード代表と比べても近い値である。

優勝するには思い切りの良い攻撃からの果敢にシュートチャンスを伺う姿勢が不可欠なのが解ります。

②ボールの奪い合いの攻防で勝つ (Duel on 1 vs 1)

JFAのテクニカルニュースvol.84に掲載された国内大会テクニカルスタディの中で報告者宮崎氏は「上位進出チームの球際の強さが高いレベルで実践されている」と述べ

表3. インカレベスト8校及び主要大会優勝チームの試合分析データ

	試合数	1 試合平均									
		得点	失点	シュート	枠内シュート	CK	オフサイド	ファウル	被ファウル	警告	退場
優勝 流通経済大学	4	2.8	1	12.8		5.3	2	15.3	14.3	0.8	0
準優勝 法政大学	4	2	2	12.8		6.3	3.5	14	13.5	2	0.3
ベスト4 関西大学	5	1.5	1	7.3		5.3	1.8	11.3	12.8	1.3	0
ベスト4 東京国際大学	4	1.8	1	8.8		4	2.3	11.5	13.5	1.5	0.3
ベスト8 順天堂大学	2	3	1.5	10		3	5.5	7.5	9.5	0.5	0
ベスト8 びわこ成蹊スポーツ大学	3	1.5	1.5	10		4	2.5	14.5	17.5	1.5	0
ベスト8 福岡大学	3	2.7	1.3	6.7		2.7	3	14.5	11	1.3	0
ベスト8 筑波大学	2	1	1	8		8	0	7	13.5	1.5	0
第29回ユニバーシアード競技大会 (2017/台北) ユニバーシアード日本代表	6	3.2	0.3	13	9	6.3	2.2	14.8	12.3	1.3	0
FIFA U-20ワールドカップ韓国2017 U-20日本代表	4	0.8	1.5	13.5	4.3	4.5	0.3	14.3	11.8	1.3	0
第96回全国高校サッカー選手権 前橋育英高校	5	3.2	0.2	16.2		6.2	1	10.4	9.4	0.4	0
2017明治安田生命J1リーグ 川崎フロンターレ	34	2.1	0.9	12.6		5.2		13.7	13.6	1.2	1

※少数第二位を四捨五入、延長戦を含む、ファウルは被直接FK、被ファウルは直接FK

ている。

流通経済大学のファウル数は1試合平均15.3とベスト8のチームでは最多で、球際は強くいけているがファウルになっている場面は改善できるのではと推測される。また警告は0.8と少ないことから、球際の強く行っているが警告が出るような汚いプレーではなく迫力ある守備ができていたと言える。

2) Japan's Way 日本人選手のストロングポイントを活かす

①スピード&テクニックで勝負する (Speed & Technique)

両サイドのワイドアタッカーのFW立花とFWジャーメイン良はスピードを武器に個人で打開していける選手であった。特に立花は準決勝、決勝の2試合連続ゴールは圧巻な活躍だった。

決勝戦で2ゴールのMF新垣は左利きで独特なテクニックで相手を翻弄していた。

②コレクティブに闘う (Collective)

全員攻撃、全員守備ができていた。守備面では4試合で失点1に現れているように誰一人さぼる事なく、集中して団結していた。攻撃面では個人能力が目立っていたがサポートが多く厚い攻撃ができていたので個人が活きたと分析できる。

③運動量/走力で圧倒する (Keep Moving)

4試合中2試合が延長戦でPKまでいかずに決着がついているので走り勝つことができていた。福岡大学戦の延長後半ロスタイムのゴールや東京国際大学の延長前半のゴールが証明している。今後はGPSで走行距離を計測して活かしたい。ターンオーバー制が効果的に働いたのも走り勝てた要因の一つと分析する。

6 統括

1) 攻撃

得点の割合から見ると、中央エリアからの攻

撃が全体の46%を占める。左サイドの攻撃が18%、PKが18%、FKが9%、スローインから9%となっている（図16参照）。

現代サッカーではチーム全員の守備意識の重要性は多く述べられていて今大会の上位チームも1試合の平均失点は1失点となっている。JFAのテクニカルニュースvol.84で国内大会テクニカルスタディの報告者宮崎氏は「流通経済大学は、大会を通じて1試合平均2.8得点（2位）、12.8本（同率1位）のシュートを放ち、選手の個性を存分に生かした多彩なパターンの得点により勝利し、見事に優勝を果たした」と述べている。中央からの攻撃が得点の全体50%近くで7人の得点者がいて複数得点が4人いる事から攻撃のパターンやコンビネーションが確立されていることがわかる。これは攻撃陣の5名が流経大柏出身で高校から大学まで6年から7年間共にプレーしている事から、互いのプレーの特徴を理解して活かすことができていると推測される。

左サイドの攻撃からの得点の割合が18%というのは左サイドバックの小池に依るところが大きい。小池は大学の1年時からレギュラーとなり関東大学リーグで新人賞を獲得。大学2年時には強化指定選手として鹿島アントラーズで

ヴァンカップに出場。大学3年時にはユニバーシアード代表として世界一にも貢献。小池を起点に攻め上がる左サイドは流通経済大学の攻撃のアクセントになっている。

2) 守備

大会総失点4点。1試合1失点していることになる。DFラインのメンバーは小池（新潟ユース）が全試合出場だが、その他は毎試合違うメンバーで固定されなかった。過密日程を考慮してターンオーバー制を導入しての戦術だが、失点に少なからず影響を与えた。

失点の内容は、CKから1失点、ミドルシュートから2失点、右サイドを崩されて押し込まれた1失点である。本来レギュラーGKのオビパウエルオビナがU20日本代表のタイ遠征で12月6日から17日までチームから離脱して、IPU・環太平洋大学の試合後に合流したが、中野雄二監督は、そのまま新井（西武台出身—清水エスパルス内定）を起用し続けた。最初の試合を完封したこともあるが、流れを大切に決断である。新井もプロ内定の実力者で守備陣に適切なコーチングする事が特徴のGKである。固定されない守備陣をまとめたのは間違いなく新井である。相手のロングボールに対しては今津とアピアで跳ね返し、ラインコントロールは守田と小野原（ジュビロ磐田ユース）の役割で試合に安定感を与えた。

3) 勝因

コンディショニングの成功があげられる。GPSを活用して疲労調整を測った。データの解析などは今後の課題にはなるが選手起用の資料になる事が証明された。4試合中2試合が延長戦での勝利という事で短期決戦でのコンディショニングは重要な要因になると考えられる。監督のチームマネジメントも効果抜群であった。目標と方向性や価値観の徹底や試合前・ハーフタイムのミーティング内容が適切であった。計算されたターンオーバー制で19名という約2チーム分の選手を起用して勝利に導いた。

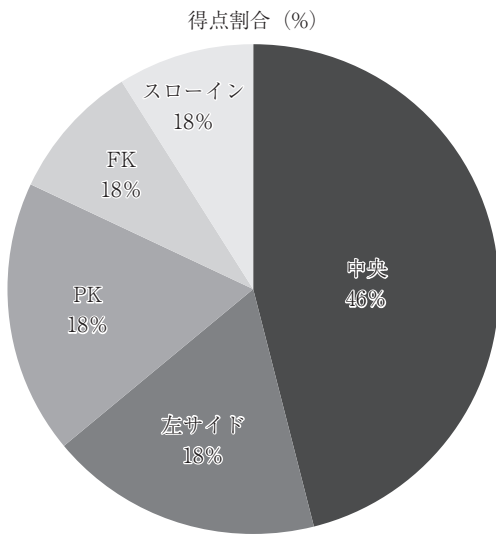


図16. 得点割合

7 おわりに

以上、2017年度第66回全日本大学サッカー選手権優勝までを振り返って分析・総括した結果から、重要だと思われる点をまとめる。

1) 目標達成までのプロセスとチームの機運の醸成

監督が年間を通じて目標の方向性や価値観を徹底したこと、また、選手、スタッフだけでなく、OB、応援団が一致団結したことで、目標を達成するまでの過程で勝てない時期もチームの機運を高く保つことができた。

2) ターンオーバー制の導入と効果的な活用

過密日程を考慮してターンオーバー制を導入し、GPSで走行距離を計測して疲労度を考慮し多数の選手を起用した結果、運動量・走力で圧倒し走り勝つことができた。一方で、守備陣が固定されないことが失点につながったとも考えられるが、メンバーが変わっても流れを大切にす適切なコーチングでカバーすることができた。

3) ゴールに向かう全員攻撃の意識とそれぞれの個性を活かした多彩な攻撃パターンの確立

攻撃陣がそれぞれの個性を活かして思い切りの良い攻撃から果敢にシュートチャンスを行い、互いのプレーの特徴を理解して活かそうとしていたことが、多彩な攻撃と得点に結びついた。

出場選手の19名の出身校を調べると9名が流経大柏出身であり、高校時代から長い間一緒にプレーしてきた、ないし共通した指導者から同じコンセプトで指導を受けてきたことが、今回の結果に大きく影響していると考えられる。日本サッカーの課題でもある決定力不足も長年同じチームでコンビネーションを高めることにより改善する事ができる可能性があるのではないかと考えられる。

参考文献

- 公益財団法人 日本サッカー協会技術委員会「JFA TECHNICAL NEWS vol.84」公益財団法人日本サッカー協会、2018年3月、53-57頁
- 一般財団法人全日本大学サッカー連盟「平成29年度 第66回全日本大学サッカー選手権大会 ガイドブック」、2017年12月、20-83頁
- 公益財団法人 日本サッカー協会（JFA）ホームページ JFA中期計画2015-2022（6）代表強化 2015 日本代表強化指針、2015年4月、37頁